

〔学 会〕

東京女子医科大学学会 第253回例会抄録

日 時 昭和58年5月19日 (木) 午後1時30分より
場 所 東京女子医科大学 本部講堂

1. 2,4-トリレンジイソシアネートの生体作用に対する動物実験の研究
(生化学)

○荒木 仁子・篠崎理恵子・
堀川 博朗・降矢 熒

2,4-トリレンジイソシアネート(TDI)の生体に対する作用研究の一環としてBALB/C及び4CS-マウスにin vivoでTDIを投与した結果を報告した。

2. 海外長期滞在者の消化器系寄生虫感染率
(寄生虫学)

○山浦 常・白坂 龍曠・松本 克彦・
和田 芳武・岡本 雅子・小林 和代・
矢後 文子

(消化器内科)小幡 裕・藤野 信之

近年、諸外国との交流が活発化するにつれて、海外帰国者によって我が国に持込まれる輸入寄生虫病の増加が問題となってきた(山浦ら, 1976)。著者らは、輸入寄生虫病の実態を把握する目的で、海外長期滞在者の帰国後の消化器系寄生虫検査を実施したので、その成績を報告する。

調査対象および方法：調査対象は、1977~1980年までに帰国した、国際協力事業団、青年海外協力隊の隊員(以下、協力隊員)750名と、1979~1982年までに帰国し、東京女子医科大学消化器病センターにおいて海外渡航者検診を受診した海外駐在員とその家族(以下、一般事業従事者)1,717名であった。対照として、海外渡航前の協力隊員198名について調査した。消化器系寄生虫の糞便検査は、ホルマリン・エーテル法、硫酸亜鉛遠心浮遊法を主体にして行なった。

調査成績：協力隊員および一般事業従事者とも各帰国年度間の寄生虫感染率は殆んど変化なく、各年度合計の感染率は前者30.7%、後者11.2%で、対照の感染率2.5%を大きく上回る成績であった。性別感染率は、

一般事業従事者では、男性13.3%(176/1,324名)、女性4.3%(17/393名)と男性が高く、協力隊員では差はなかった。虫種別感染率は、ランブル鞭毛虫感染者が、協力隊員130名(17.3%)、一般事業従事者91名(7.3%)と最も多く、赤痢アメーバが各々12名(1.6%)、11名(0.6%)に検出された。以上の結果より、海外長期滞在者の消化器系寄生虫感染率は、現地での職種などによって差はあるが、かなり高率であり、輸入寄生虫病に対する早急な対策が望まれた。

質問 (内科1) 竹内富美子

1) 5年間毎年感染率が変らないということは、その予防対策はどうなっているのでしょうか?

2) もし予防対策を行なっているのでしたら、不注意で感染するのでしょうか? 原住民の感情を損なわないように、よく接触するのはよろしいですが、なにも感染する必要はないと思います。改善対策が望まれます。

応答 演者(寄生虫学) 山浦 常

1) 予防対策は行なっております。

2) 現地における公衆衛生的対策が十分でなく、個人の衛生的な対応だけでは寄生虫の感染予防は困難となっている。そのための警鐘として本発表を行ないました。

3. 急性薬物中毒による意識障害患者の脳波に見られた α 帯域の活動について

(神経精神科)

○坂元 薫・堀川 直史・柴田 取一
(麻酔科) 渡辺 雅晴

急性薬物中毒により臨床的に昏睡状態にある患者の脳波において、 α 帯域の活動を認めた1例を経験したので、ここに報告する。

症例は28歳の女性。昭和57年11月8日午後8時頃、ブランデー約360ml飲酒後、アモバルビタール7gを